

---

# 月の光に恋歌を 番外編4 『待望』

きつねこぶた

---

## 注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

### 【小説名】

月の光に恋歌を 番外編4 『待望』

### 【Nコード】

N1641E

### 【作者名】

きつねこぶた

### 【あらすじ】

架空の中華風国、項貴国。新たに起用される官吏の報告を受け、若き皇帝は心を揺らす。その中には、自分が今も恋い慕う姫を妻に迎えた青年の名があった。ムーンライトノベルズ掲載の『月の光に恋歌を』番外編です。

## 第一話

項貴国に春の兆しが見え始めていた。

雪解けと共に茶色の地面と若い新芽が顔を出し、これから訪れる季節を色づかせようとしている。

そんな時期、後宮に一人の人物が訪れた。

十二貴人の一人、翠候 翠 霸斬。

謁見の間で居住まいを正す彼に、女官が皇后の入室を告げる。

膝をつき、首を垂れて、彼は上座に座る皇后を迎えた。

上段の椅子に座り、紗の幕が下ろされて、ようやく顔を上げることが許される。

翠候は型どおりの挨拶の言葉を述べ、皇后の許しを得て、立ち上がった。

「今日は、ごく私的な事でお呼びしたのです。どうぞ気を楽しませいます」

皇后は微笑むと、幕を上げさせる。

最初の挨拶の時は形式に従って、二人の間は遮断されるが、それが済んでしまえば、大抵皇后は直接話しかけてきた。

臣下としてはもったいない限りだが、これも翠候の人徳の賜物といえよう。

彼は皇帝の信頼厚い重鎮で、常に国の為に尽くす忠臣として知られている。

皇帝ばかりか皇后、諸侯の信認も大変に厚かった。

皇帝や皇后の私的な相談まで受けることもあるほどで 今日も どうやらそんな内容のようである。

皇后は女官に命じ、謁見の間のすぐ後ろに設けられた中庭に茶席を用意させた。

そこに翠候を導き、一緒に茶を飲もうと誘う。

驚きながらも、翠候はありがたく座り、皇后からお茶を賜った。しばし後宮の話や皇帝の身边のことなど、世間話をしていたが。

茶碗を置き、改まった瞳で皇后は話を切り出した。

「このたびは、麗華姫のご縁談が調ったとか。お祝いを申し上げます」

「恐れ入ります」

やはり来たか、と翠候は唇をゆがめる。

突然の呼び出しは、娘のことであろうと予想していたが、やはりだ。

今、皇宮はおろか都の端々にまで、翠家はうわさの種になっていたからだ。

十二貴人 翠候は皇帝の信厚く、その権力はゆるぎないものとして名を馳せていたが、彼の一人娘 麗華姫は都でも評判の変わり者として有名である。

元々は皇帝の寵姫、未来の皇后と呼ばれていた彼女だが、後宮を襲った悲しい悲劇の事件のために、すっかり変わり果てた姿になってしまった。

姫とは思えない振る舞いの数々で、都はおろか地方にまで面白おかしく噂は飛び交い、なかなか縁談話も決まらなかったのだ。

そんな彼女をやっと引き受けた相手というのが、なんと州に名をはせた女装癖のある男だということで、これも茶飲み話の一つとして、いろんな尾ひれをつけて広まっていた。

国一の権を誇る翠家でも、娘がこれでは将来は と、貴族達の間では、同情というより蔑みのまなざしが注がれる。

そしてそれだけでは終わらず、なんと翠候は、そんな婿を翠家の跡取りとして迎え入れ、皇帝の側に仕えさせようとしていた。

もはや翠候まで気が触れたのではないかというのが、最近の皇宮ではもっぱらの噂である。

後宮の奥に住まう皇后の耳にも、当然噂は入ったに違いない。

愛する息子 皇帝の側に、そんな男がやって来るなどと、皇后にとつてはたまらないだろう。

自分に一言、二言、言いたい心境になるに違いないと、翠候は内心で溜め息をついた。

「なんでもお相手の方は、先々代の皇帝の御世に、大將軍として名を馳せた鳳家の血筋とか」

「はい。文武両道に秀でており、なかなかの逸材でございます。婿として申し分ない者と思っております」

翠候は済まして申し上げた。

皇后は睫毛を伏せ、軽く溜め息をつく。

「まわりくどい話はなしに致しましょう。翠候、わたくしは心配なのです」

「と申されますと」

「その婿になる人物について、かなりひどい噂が立っております。

あなたもご存知ではありませんでしょうか」

皇后は瞳をあげ、翠候をじっと見つめた。

「なんでもその者は、女装癖があるとかないとか 州に名を知らない者はないほどで、普段から女の姿でいるそうですね」

「……」

「更に男たちをその魅力で手玉に取り、男子でありながら男の崇拝者を多くお持ちだとか 女より男に興味があり、男色家との噂も

ございます」

「男色家ですか」

さすがにそこまでの噂は聞いていなかったもので、翠候は驚いた。

「更にかんりの我が俣者だとも 花嫁修業に入った姫たちから衣や飾りを取り上げて、粗末な衣服と部屋を与え、朝から晩まで下女としてこき使い、服従しなければひどい暴力を振るうとか。何人もの姫を傷つけ、実家に追い返したそうではないですか」

「はあ……」

「いくら血筋が良く、学に武に秀でた者であっても、性格に問題あ

りでは困ります。そんな者にあなたは一人娘を与えるというのですか。それだけでも言語道断なのに、翠家の跡取りにして、後の翠候にするなどと酔狂の至りです」

「……」

「そのような者を皇帝陛下のお側に置くなど、もつてのほか 翠候、どうか今一度お考え直してください」

真剣に訴える皇后に、翠候は少々可笑しくなった。

「皇后様、ご心配には及びません。噂は噂 真実ではございませんん」

「そつでしようか」

皇后は、疑い深そうに翠候を見る。

「陛下も 陛下も大層ご心配になっていました。麗華姫のことですから」

皇帝のことを言われ、翠候も顔を曇らせた。

娘をいまだに皇帝が想っていることは、彼もよく知っている。

麗華が皇帝の想いを拒否したため、身を引いてくださったのだが、心の奥にはまだ忘れがたいものがあるのではないかと、翠候も危惧していたのだ。

彼は口調を改め、皇后に言った。

「陛下にまでご心配をおかけして、本当に申し訳ございません。ですが皇后陛下」

彼は真摯な瞳を、国一の女性に向ける。

「わたしは常に皇帝陛下の御為に動いております。今回の件もしかりです」

「え？」

「陛下のお側にいる諸侯、重臣たちは、皆、真面目でよく働き、国のために尽くしております。ですが将来を考えますと、もっと優秀な人材が必要ではないかと」

「優秀な人材？」

「恐れながら、候家に生まれた者ならば、試験など受けることなく

無条件に高位につけます。重臣と名を馳せる者たちの子弟もそうです。勉強や武に秀でずとも、無条件に陛下のお側に仕えることが出来るのです」

「それはそうですが」

「ですが、そういう者たちだけでは国が困難に陥った時、陛下を支えるのは難しいでしょう。先を読み、市勢をよく知り、貴族たちの融和を保ち、時には自らの剣を持って、陛下をお守りする者が必要です」

皇后は黙した。

翠候の指摘はあまりにも的確で、皇后自身も危惧していたことであつたのだ。

皇帝を支える十二貴人たちの中では、翠候が最も若い。

中にはそろそろ足腰が萎え、老後を迎える者もいて、その息子に全権をまかせて、表に出てこない候もいる。

跡取りの顔ぶれをみれば、皆、世間をよく知らない平凡な貴族ばかり。むろん少しは勉強もしているだろうが、平凡で特出した人物はあまりいなかった。

野心もなければ欲もないが、その日その日を安楽に暮らせれば、それ以上の事には手を染めない者たちがほとんどで　こんな人材ばかりで皇帝はどうやって政を成すのだろうか、心苦しく思っていたのだ。

「私は常々、陛下のお側に共にあり、良き理解者として陛下を支え、野心なく私心なく国のために仕えることの出来る者を探しておりました。幸いわたしには息子がおりません。なので誰はばかることなく優秀な人材を探し出し、養子として候の名を与えることが可能です」

「では、この噂の主がそうだと」

「はい。彼は申し分なく陛下を支え、その懐刀となれる男です。ですがそれには条件がございます」

「条件？」

翠候の言葉に、皇后は目を見開く。

彼は微笑むと、皇后に言った。

「その条件は、いずれ陛下に奏上申し上げるつもりです。皇后様、どうぞお心を安んじられませ。必ず陛下は、国一の臣下をお持ちになられることでしょう」

翠候の言葉に、不安の残る表情ではあったが、皇后は静かにうなずき、話を終えた。

## 第二話

皇后との茶会の次の日。

朝の朝議において、科挙の事が議題に持ち上がり、朝議は活気付く。

「今年の科挙には、うちの息子が入りましてな」

「おお、それはそれは。さぞ優秀な成績を収められたことでしょう」

「いや、それほどでも。でも内々のご沙汰で、都に配属されることになりました」

「おや、それはおめでたい」

口々に自分の息のかかった者の話をする貴族達を、冷めた目で見やりながら、翠候は陛下のお出ましを待った。

齋陽帝が入殿し、上座に着くと、さっそく本日の朝議が始まる。

上官がうやうやしく巻物を陛下に捧げた。

「陛下、今年の科挙の結果にございます」

渡された巻物を受け取って、皇帝はうなずいた。

「今年は全国より二百二十名が受験、九十七名が合格となりました」  
「そうか」

上官は、更に口元にちらりと笑みを乗せて続ける。

「今年は藍候の妹君のご息が、たいそう優秀な成績を取られました。本当にめでたいことです」

藍候が膝をつき、陛下に申し述べた。

「身内のわたくしが申すのも何ですが、大変優秀な者でございます。お側に置かれましたなら、きっとお役に立つのではないかと」

おそらく事前に打ち合わせてあったのだろう。

上官と藍候は、上手く身内を皇帝に推挙した。

あまりにも魂胆が見えすぎて、齋陽帝は溜め息をつき、それは良かったな、とつぶやく。

巻物を広げ、帝は目を通した。

やはり主席と副主席が気になるどころだ。

藍候の甥は何番目なのかと目を走らせると、なんと五十位であった。

(一番でもないのに、随分な自信だな)

そう思い、また主席の名に目をやる。

(凰 龍焰…… 凰家か。聞いたことがないな)

都の貴族ではないようだ。

姓があるから平民ではないようだが、地方の貴族では、最初はせいぜい州宮の最下官に配属されることだろう。

(第二位と大差をつけての成績だ。武門の結果も良い……惜しいことだな)

こういう優秀な人材こそ、自分の側に置きたいのに。

揺れる心を押し隠し、それでも興味を持って、斎陽帝はこの名を口にした。

「主席は、なかなか優秀そうだな。 凰 龍焰 どここの者だ」

皇帝の問いに、上官は顔をゆがめて答える。

「なんでもインファン州の貴族だとか。陛下がお心に留めるほどの者ではございません」

田舎の取るに足らない男だろうという口ぶりに、斎陽帝は気分を害した。

「科挙の試験は、国の未来を担う重要な臣を選抜するものだ。国のため、皇帝たるわたしのために尽くそうと日々努力して試験に臨み、主席となった者を心に留めずして何とする！ この者の詳細をこちらに持て」

「は、はあ……」

上官は額に汗を浮かべながら、下官に命じ、一枚の調書を探させる。

それは科挙の試験を受けるに当たって、本人の情報を各地方の塾より推薦書として作成し、提出したものだ。

「インファンの凰家 先々代の皇帝に仕えた大將軍の子孫か。な

かなかの家柄だな」

「まあ、そうですね。一地方の貴族としてはまずまずでございませう」

藍候が、苦虫を噛み潰したような顔でつぶやく。

「次男か。履歴は、学問所の教師 家族は家長たる父と兄と兄の妻二人……ん？」

齋陽帝は、最後に記された一文に目を通し、驚愕する。

(これは……)

手を震わせ、顔色を変える皇帝に、皆、怪訝そうな目を向けた。

「陛下？ いかがなさいましたか」

上官が、気遣って言葉をかける。

齋陽帝は調書から目を離し、自分をじっと見つめる翠候に視線を注いだ。

「彼は、翠候、あなたの娘婿か」

「恐れ入ります」

澄まして一礼する翠候に、その場にいた全員が驚きのまなざしを投げる。

「まさか……今年の主席が翠候の？」

「例の姫の相手だと？」

「では、翠令息となる者だというのが」

ざわざわと朝議の場がざわめいた。

皆、翠候の娘婿のことは噂でいろんな話を聞いている。

しかし、まさか科挙の試験で主席になる程とは思ひもしなかったのだ。

齋陽帝は、改めて調書に目をやる。

自分と同じ歳の青年だ。

一体どんな男なのか。

調書にはわずかばかりの情報しか載っていないが、怪しい噂は齋陽帝の耳にも入っていた。

( 女装癖を持ち、男色家で、我が侂な男 )

だが調書の中には、そんな事は何一つ記載されていない。

添えられた推薦書きは前インファン州官長のもので、彼は無償で学問所を開き、身分、年齢を問わず、求める者に学を教えていたと書かれてあった。

(これを見る限り、優秀で比の打ち所のない者に思えるが )

ではあの様々な噂の根拠はなんなのか。

斎陽帝は聞くか聞くまいか、随分迷った。

嫁の貰い手がなかった麗華が渋々入った家であり、よもや彼女がすんなり嫁に行くとは翠家でも思っていなかったと聞いている。

ところが麗華は、予想外にもその相手を気に入ってしまい、結婚を承諾したとか。

自分にも振り向かせる事が出来なかったお転婆姫の心を、どうやってものにしたのか 斎陽帝は気になってしょうがなかった。

(麗華、君が選んだ男は、どんな者なのか)

胸の奥が、じわりと妬かれて熱くなる。

(花嫁修行の期間を終えたら、君はまた都に戻ってくると思っているのに……)

問いたそうに顔をゆがめる皇帝を、翠候はじつと見た。

その表情の揺れる様を、一片たりとも逃さぬように視線を注ぐ。

本当はその壇上から降りて、翠候の胸倉を掴んで叫びたいことだろう。

変わり果てた娘とはいえ、斎陽帝にとっては永遠に心の中にいる少女である。

それを年頃になったため、しかたなく少々問題のある家に花嫁修業に出したのだ。

誰もが 皇帝でさえ、麗華がそんな相手と一生を共にしようなどとは考えないと思っていた。

しかし麗華は相手に身も心も捧げてしまい、あまつさえその者は、この朝廷に入ってくるという。

想いかなわぬ愛しき姫の心を我がものにした男と、皇帝はこれか

ら手を取って政を行わねばならないのだ。

それには、どれだけ心の痛みが伴うのか。

(陛下、これはあなたが名君となられるかどうかの試練でございます)

翠候は、目で己の主に語りかける。

(貴方ご自身のお心に打ち勝ち、この者の忠誠心を勝ち取るか、それとも感情に負けて、朝廷に悲しみの雨を降らせるか)

己が家と娘の将来を懸けて、皇帝に差し上げる唯一の機会。

おそらくここで、この青年の心を得なければ、斎陽帝の治世は一生孤独に終わるだろう。

まわりにいる貴族たちは皆、皇帝の心を理解することもなく、自分の名声と富、家のことしか頭がない。

だがこの鳳 龍焔は違っていると、翠候は確信していた。

(民を知り、国に忠義を尽くす力を持っている。更にほんくらな貴族の子弟と違って、国一の優秀な知識と武技を持っているのだ。こういう者の忠誠を勝ち取れる皇帝でなければ、国がどうして起ち行こう)

翠候の目線に何かを感じたのか、斎陽帝はふつと表情を緩めた。

そして調書を上官に返しながら、言葉をかける。

「頼もしいことだな。わたしの側にこんな優秀な者が来るとは

彼に会う日を楽しみにしているよ」

「お言葉、嬉しく思います」

翠候は微笑んで、一礼した。

他の貴族たちは好奇心な目線を投げかけてきたが、皇帝がこれ以上何も言わなかったので、翠候の娘婿の話題は、ここで終了となった。

朝議のあと、翠候は皇帝に謁見を求めた。  
すぐに許可があり、皇帝の宮に参内する。

昨日と同じように茶器が調えられ、皇帝が自分としばらく話をしようと思っていることが感じられ、翠候は頬を緩めた。

彼が居間に膝をつくとき、斎陽帝は暖かな笑みをみせる。

「立ってくれ。わたしはあなたを身内同然に思っているのだ。堅苦しい挨拶はなしにして、座ってもらいたい」

「恐れ入ります」

下官が入ってきて、茶を入れ、菓子を添えて翠候の前に出す。

ありがたくそれをいただきながら、翠候は己の主が口を開くのを待った。

斎陽帝は、ふつと溜め息を漏らす。

「翠候、あなたには本当にいつも感謝している」

「陛下」

「足りないわたしの側に仕え、わたしのために動いてくれる。そんなあなたの決断はいつも間違いがなく、常にわたしのためを思ってくれていることは承知している」

「もったいないお言葉です。臣として、わたしは当然の事をするまで 陛下のような方にお仕え出来て、わたしこそ嬉しく思っております」

頭を下げる翠候に、斎陽帝は悲しげな瞳を向けた。

「でも 正直に言って、今回のあなたの決断は、わたしには少々心苦しいものがある。わかってもらえるか、翠候」

「……はい」

斎陽帝は瞳を揺らし、寂しそうにつぶやく。

「麗華の選んだ相手というだけでも胸が痛い。彼女を思いきれたつもりでいたのにな」

「……」

「わたしは、あきらめたつもりだったのに、やはりまだ彼女を……」  
俯き、斎陽帝はまるで自分自身に語りかけるように、ぽつりと言葉を漏らした。

「彼女には、誰よりも幸せになってもらいたいのだ。わたしが幸せ

に出来ないのなら、せめてわたし以上の男にめぐりあつて欲しい。  
このわたしを完膚なきまでに打ちのめし、かなわないと思わせるよ  
うな者に」

「陛下」

「彼は 凰 龍焔は、そのような男なのだろうか」

顔をあげ、真剣なまなざしを向けながら、斎陽帝は問うた。

その瞳の奥に潜む辛い心を肌身に感じ、翠候も真摯な瞳で答える。

「陛下。それはどうか陛下ご自身の目で、お確かめくださいませ」

「……」

「もうすぐ彼は陛下の前に参上いたします。その場で、陛下が直接  
お確かめいただくのが最良かと」

「翠候」

「ただこれだけは申し上げておきます。彼はあの不肖の娘の心を捉  
え、身も心も捧げさせ、このわたしが翠家を与えるにふさわしいと  
判断した者です。そして陛下のお側に必要な人材と、わたしが認め  
た者なのです」

「……」

「陛下のお側には、優秀な臣下が必要です。残念ですが今の朝廷に、  
そのような資質を持つ若者はおりません」

翠候は、溜め息をついた。

「上流貴族の子弟ばかり るくに努力もせず、世間を知らず、財  
を使うことのみに関心を動かす。己の身边や実績は、金にまかせて優  
秀な下官を雇って守らせる。そういうことばかりに長けているよう  
な者では、この先、国はどうすれば良いのでしょうか」

斎陽帝は、睫毛を伏せる。

自分でもそれは思っていた事だったので、鋭い指摘に何も言えな  
くなった。

「更に陛下のお心に配慮し、側で話し相手になりうるほどの者でな  
ければなりません。わたしが調べた限りでは、彼は州都では大層人  
望が厚く、どうやら人の心を捉える魅力があります。彼を慕う

平民たちが多くいると報告を受けました」

「そうか」

「平民だろうと皇族だろうと貴族だろうと、すべて人間なのです。平民にこれだけの人望があるのなら、朝廷において貴族たちの間をうまく立ち回り、融和を計るなどたやすいことでしょう。頭もよく策に長けるとの報告も受けています。政を行うにしても、良い知恵を出してくれるのではないのでしょうか」

「そんな者だとありがたいのだが」

「こんなことを申しあげたら不快に思われるかもしれませんが、わたしは大変彼に興味を持っております。おそらく陛下もそうなられるのではないかと期待しているのですよ」

「期待？」

「陛下に、うちの娘のことなど忘れさせてくれるような魅力的な人物ではないかと」

翠候の言葉に、斎陽帝は少々複雑な顔をする。

「……わたしには、そういう趣味はないぞ、翠候」

憮然として答える斎陽帝に、翠候は微笑んだ。

「もちろん存知あげております。でも色恋抜きにして、魅力的な者というのはおるのですよ、陛下」

「そういうものか」

「はい」

青年らしくどこか納得いかなげな顔の斎陽帝を、翠候は暖かな目で見守った。

(うちの婿は、おそらく陛下の心をも捉えるに違いない)

そしてそれは皇帝にとって吉となるか、凶と出るか。

「彼は陛下の良き理解者、忠臣となることでございます。ですがそれには条件がございます」

「条件？」

「はい。彼の心を陛下が得られることです」

「鳳 龍焰の心を？」

目をまたたかせ、齋陽帝は翠候を見た。

「そうです。彼の忠誠心を勝ち取らねばなりません。陛下の人徳で」  
「……」

「彼はお側に群がる苦勞を知らない貴族達と同じではありません。貴族の身分を捨てても、国を捨てても、十分に生きていける実力を持つ者です。そんな力を持つ者を側につなぎとめておこうと思われのならば、陛下の暖かいお心で彼を感動させ、生涯お側にありたいと思わせねばならないのです」

齋陽帝は沈黙した。

そのようなことは、考えたこともなかったのだ。

「陛下、貴族にとって、陛下にお仕えするのは代々の習慣となっています。こんなことを申し上げてお心を害されるとは思いますがたとえ玉座に座っているのが物言わぬ石であっても、顔色を変えず、仕えることが出来るのです」

「随分な言葉だな」

齋陽帝は、苦笑しながら答える。

「ですが民は、そういうわけにはいきません。財を持たぬ分、彼らは生きる強い力を持っています。陛下のお側にいることを不快に思うなら、自らどこへでも行って暮らすことが可能だとわかっているのです。だからこそ心を得る必要があります。鳳 龍焔は貴族ではありませんが、平民と苦勞を共にし、生きて来た者 朝廷の中でいかに出世し、甘い言葉で自分を良く見せるか、そんなことばかり考える者たちとはわけが違います」

「そうだろうな」

「そこに価値を持たぬ者ゆえ、陛下のお心に価値を見出させなければなりません。そうでなければ彼はいつでも翠令息の身分を捨て、うちの姫の手を引いて、どこなりと去ってしまうでしょう」

翠候の言葉に、齋陽帝は目を閉じた。

頭の中で、今、言われた言葉を反芻する。

目をあげ、再び翠候を見たとき、齋陽帝の瞳には力が宿っていた。

「翠候、あなたの言いたいことはよくわかった。わたしは一国の皇帝として、彼にふさわしいと認めさせてみせよう。感情に流されることなく、民のために真に尽くす忠臣を手に入れてみせる」

「おわかりいただけで、嬉しく思います、陛下」

翠候は、嬉しそうに笑みを返し、一礼した。

### 第三話

少女が笑っていた。

『綺羅 っ』

明るい声、まぶしい笑顔。

桃色の想花を抱え、軽やかな足取りで自分のところに駆けてくる。触れたくて、手を伸ばすと、その幻影は、突然消えた。驚いて、目を凝らす。

辺りに静かな楽の音が響き、淡い蛍の光が舞い散った。

(ああ……これは……)

溜め息と共に前を見ると、月光と蛍に囲まれて、少女が煌きながら踊っている。

本当に楽しそうに、彼女は白い布をひらめかせ、指先までピンと伸ばしてしなやかに舞っていた。

あの日と同じように。

うつすらと瞼を開けると、そこは豪華な天蓋の下だった。

斎陽帝は身を起こし、まだ夢の余韻が残る胸に手を当てる。

(あんな夢を見るなんて)

体が汗ばんで、心臓が音を立てる。

彼は溜め息をつくと、横に眠る后を起こさぬように寝台から降りた。

衣を羽織り、寝室から居間に入ると、卓の上に窓から月の光が差している。

まるで、斎陽帝に卓の上の物を指し示すように。そこには、巻物がいくつか載せられていた。

彼は卓に歩み寄ると、巻物の一つを取り上げる。

じつとそれに目を注いだ。

(やはりこれのせいなのか……)

その巻物は、今年の宣旨を記したものだ。

本日、国の全土で皇帝たる彼の名において、宣旨が下される。

国の中枢を守る重臣から、末端最下級の下官にいたるまで、すべての官が彼の命を受けることになるのだ。

そして今年は特に、斎陽帝にとって見逃すことの出来ない者が、国の中枢に入ってくる。

彼にあんな夢を見せた原因となる人物が。

彼は巻物を卓に置くと、静かに部屋を出て、中庭に立った。

眠気は吹き飛び、心は天にかかる月を彷徨う。

今、彼の心を占めるのは、収まりきれない自分の感情。

ずっと隠してきたはずなのに。

忘れていたはずなのに。

もう二度と、そうは想わないと決めていたはずなのに 　　まだ未

練があるのだろうか。

(麗華……)

斎陽帝は、煌々と光りを注ぐ月を見上げた。

彼女は、この月のように闇でも明るく輝いて、自分の中から永遠に消えることはない。

(もつすぐ帰ってくるのだな。都に……一人ではなく)

自分の元を離れ、麗華は随分変わったと聞いた。

揉め事ばかり起こし、剣を振り回し、貴族の姫とは思えない荒んだ娘になってしまったとか。

今、どうしているのかわからないが、そんな彼女もついに結婚するという。

(君が選んだ男は、一体どんな者なのか)

どんなに愛しても、決して受け止めてくれなかった少女。

そんな彼女が、心を決めた者とは。

胸の奥が疼いた。

麗華は、国の最高峰、十二貴人と呼ばれる候家の姫。  
彼女の夫となる男は、皇帝たる自分の側で、政の一端を担う者となるのだ。

彼にとつても、とても重要な人物になる青年。

(凰 龍焰か)

その名を胸の内ですぶやいて、齋陽帝は月を見上げた。

(来るがいい。そしてその身を持って、証明してみせてくれ。麗華が選んだ夫としての証を、そして翠候が認めたその資質を)

月が真上に来たのを、ぼんやり眺めていた齋陽帝の背後から、柔らかな声がする。

「こちらにいらっしやっただのですね」

近寄ってくる女性に目を留め、齋陽帝は優しく微笑んだ。

「祐璃」

自分が愛しいと思い、選んだ少女。

麗華を失って悲しんでいた心に、安らぎをもたらしてくれた存在。  
彼女は、ずっと近寄ると、彼に寄り添った。

「もうお休みになりませんと 明日も早いのでございましょう」

「ああ、そうだな」

そう言いながら、齋陽帝は祐璃を引き寄せ、頬に唇を寄せる。

「知っているかい？ 祐璃」

「はい？」

「麗華が 彼女が結婚するそうだ」

齋陽帝の言葉に、祐璃は顔をゆがめた。

「……陛下」

気遣うようにまわされた腕に、齋陽帝は想いを込めて自らの腕をからめる。

「心配しないでいいよ。わたしには君がいる。麗華を失っても、わたしはちゃんと安らぎを得られる。そうだろうか？」

柔らかな彼女の温もりが伝わってきて、斎陽帝は胸の奥が熱くなつた。

祐璃を抱きしめて、彼はささやく。

「翠候から麗華の相手の話を聞いて、ほっとしたんだ。最初は、随分噂のある青年らしいから心配したんだけど どうやらかなり魅力的な人物らしい。あの翠候が興味を持つてるぐらいだからね」「まあ、そんなんですの？」

「ああ。だからわたしもとても関心があるね。一体どんな男なのか早く会ってみたいものだ」

斎陽帝は、愛しい後に接吻しながらささやいた。

「あの麗華をものにした男なんだ。きつとこのわたしよりも、すごい青年に違いないよ」

「そんな……陛下と比べられる者などおりませんわ」

憂い顔で彼を見つめる祐璃に、斎陽帝は暖かな笑みを向ける。

「そう言ってくれるとは嬉しいね。麗華はわたしを選んでくれた。心から感謝している。今、君がわたしの横にいてくれて」

「陛下」

祐璃は、彼の優しい言葉に頬を染める。

恥じらいながら、彼女は身を摺り寄せた。

二人は互いの想いを噛みしめながら、静かに抱き合って温もりを与え合う。

淡い月が、彼らを天上から優しく見下ろしていた。

雪がすべて消え、都に花開く時。  
ついに彼は、朝廷にやってきた。

高貴な瞳を輝かせ、自信と力に満ちた、美しい青年。

凰 龍焔は、翠候の期待以上に皇帝の忠臣、友となり、後の世にまで名をはせるほどの人物になった。

斎陽帝と共に国の発展に大きく貢献し、第十四代翠候としての責務を見事に果たし、人生を全うしたと伝えられている。

そして彼の心を得ることが出来た斎陽帝も、高德の皇帝と呼ばれ、かつてない繁栄を国にもたらした。

二人は身分を越えた良き理解者、友となり、生涯を国に捧げて生き抜いたと、歴史の書には記載されている。

終わり

第三話（後書き）

《後書き》

こんにちは。きつねこぶたです。

このお話は、ムーンライトノベルズに投稿しています『月の光に恋歌を』の番外編です。

なので本編をお読みでない方には、何がなんだかかわらないと思いますが、番外編ということで、どうぞご容赦くださいませ。

本編は、このお話に出てくるお転婆姫の花嫁修業の物語となっています。

お話のとおり、彼女の婿は、最初はとんでもないお人です。そのような人物を、何故姫の父たる翠候が婿養子にし、皇帝のお側に上げようと決意したかを書いてみました。

本編を彩る作品となっていましたら良いのですが……。最後までご一読、本当にありがとうございました。

きつねこぶた拝

# 広告募集中

小説関連広告に最適です。  
出版社や印刷会社はもちろん、  
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1641e/>

---

月の光に恋歌を 番外編4 『待望』

2009年3月24日09時23分発行